

第1回 万博のインパクトを活かした大阪の将来に向けた ビジョン有識者ワーキンググループ 議事概要（メモ）

- 日時 : 令和元年7月17日（水）10時～12時
- 場所 : 大阪府庁本館特別会議室（大）
- 出席委員 : * 敬称略。五十音順。所属、職名は開催当時。
 - 石川 智久（株式会社日本総合研究所調査部 マクロ経済研究センター所長）
 - 垣内 俊哉（株式会社ミライロ 代表取締役社長）
 - 嘉名 光市（大阪市立大学大学院工学研究科 教授）
 - 川竹 絢子（WAKAZO 執行代表）
 - 高橋 朋幸（株式会社三菱総合研究所 西日本営業本部長兼万博推進室長）
 - 野村 将揮（Aillis Inc. 執行役員 Chief Creative Officer、
World Economic Forum（ダボス会議）Global Shaper）
 - 橋爪 紳也（大阪府立大学研究推進機構 特別教授、
大阪府立大学 観光産業戦略研究所長）
 - 森下 竜一（大阪大学大学院医学系研究科 寄附講座教授）
 - 薬王 俊成（WAKAZO 執行代表）

《座長選出（橋爪委員）。また、座長の橋爪委員より、座長代理を選出（嘉名委員）。その後、事務局より資料4に基づき、ビジョン策定の趣旨等を説明。》

○橋爪委員（座長）

ありがとうございました。時間もございますので、早速、委員の方からご提案を頂戴したいと思います。

今説明ありましたように、2050年、その頃には私も90歳になるので、衰えているかどうかでございますが、2025年の大阪・関西万博を経て、その後の25年を描こうというものです。事例紹介がございましたが、東京都などで、ポストオリパラということで検討されて、7つの柱で10のアイデアが繋がって70のアイデア集の形で描かれている。

事務局原案では、3つの柱立てとなっており、このキーワード、この形でいいのかなども含めて、ご意見をいただければと思っております。

関連してですが、国の方で議論が行われている大阪・関西万博の具体化検討ワーキンググループでの検討が進んでおりまして、私は、取りまとめる立場で進めているのですが、そこでもSDGsの達成の先をどう考えているのかということも考えるべきであって、次のネクストのところまで考え始めるのが2025年であろうという意見が出ております。

事務局の整理が抜けている大事なキーワード、コークリエイション、共創、或いは

オープンイノベーションまでいるかどうかはわかりませんが、多くの人と共に作り上げていこうというのが、2025年大阪・関西万博のコンセプトのレベルとして挙がっていますので、是非、その辺りも考えていただければなということでございます。

では、時間も限られておりますので、各委員5分程度、5分以内でお願いいたします。森下委員が途中退席されますので、まずは森下委員からお願いします。

○森下委員

今回の議論で、これからの人口構成のことを考えると、非常に暗い話になってしまうので、国の方でも現在議論されているが、75歳までが生産年齢と考えるべきだと思う。人生100年時代の中で65歳を起点にすると考えると、未来デザインがない。ただ、75まで元気な人は今でもいますので、そういう意味では75歳から先が高齢者、そこまでが生産年齢と考えるデータをちょっと作り直してもらって、それを見るとかなり、変わってくるのではないかと思います。

もう一点は、大阪・関西万博、そしてIR、これが最大のものですので、ここを利用して如何に2050年に繋げていくか、これは多分、皆さん同じ意見だろうと思いますけれども、その中で、万博とIRをもっと一体的に運用する必要があるのではないかと、私としては思います。

万博に関して、大阪商工会議所と一緒にまとめた資料があつて、こちらを少し見ながら、私の資料の2ページ目以降になるのですが、具体的なところで、5ページ、日本の先端医療に関しては、日本政府としてモデルルームのようなものをつくっていただきたい。また、万博会場そのものが、未来都市の核として、そういう都市設計とインフラ整備を行う。政府のスーパーシティ構想を出しました。スマートシティをより要素を多くしたものが、スーパーシティになりますけれども、スーパーシティとして、万博特区あるいはスーパーシティ特区というのを万博、IR会場に持ってくる。

その中で、実証実験を行って、先ほどのオープンイノベーションにしてもそうだけれども、次世代のMaaSとか、或いはもっと進んだ全自動の独自の交通システムとか、それから、地域経済通貨、万博のエクスポコインなどを使って、デジタル経済圏を関西圏で作るべきだろうと。そういうことを博覧会場と関西圏で実施する。

4番目が「いのち輝く未来社会コンテスト」とありますが、これは先ほど言ったとおり、共創という中でオープンイノベーションを進めていく。少し具体的な話は、その下の資料等にも書いていますので、また、見てもらえればと思います。実際に、例えば、ダビンチのようないわゆる、ロボット手術がありますが、これを日本国内の都市から大阪と東京を繋いで、2施設でロボット手術を行うことを考えますけれども、これをもって、日本とケニアとか、日本とアルゼンチンとかで、日本医療技術等を見せるようなモデルができれば、非常にインパクトがあるのではないかと考えております。これらを活用したAIホスピタルを、政府館として作っていくのも一つの考え方かなと思っています。

もう一つは、松井市長も言っているのですが、10歳若返り、これは何が若返るのかというのがあるのですが、やはり生きがいであったり、幸せ年齢を若返らせるとか、そのことによって、前向きに社会に取り組んでもらえるような場を作ればいいのではないのかなと思います。

こうしたことを企業連合によって、多くの科学技術を結集して、自動走行・配送、キャッシュレスのようなデジタル経済圏、次世代位置情報システムの構築であったり、オンライン医療、オンライン教育、こういうことを夢洲、あるいは舞洲、咲洲で行うような街づくりをすれば、シンガポールのセントーサ島がありますけれども、ああいうところを、大阪の中につくる。それをベースに各地区での実装化を進めていくのが、一つのアイデアかと思います。

もう少し、その後が、最初の資料に戻っていただきたいのですが、1枚紙のものです。それをベースに2050年どうするのかということですが、こういう拠点を作る時に、健康医療ツーリズムの国際的な拠点を大阪に作るべきではないのか、現在のインバウンド観光客に加えて、より富裕層で長期滞在型の観光客を増やし、夢洲で、スーパーシティ、万博、IRの三者の統合的な拠点として発展させたい。先ほど申し上げたとおり、10歳若返りパビリオンというのを、現在、大阪府市でつくっていくといっているが、そこに日本政府のパビリオンとして医療のモデルルームを誘致できれば、一体型の運営ができますので、その後、IRの病院としても活用できると思いますので、万博、IRを含めた街づくりが最初でしょうね。前の万博の時は、せっかく万博の前まで北大阪急行線を敷いたのに、それを撤去したのが今の中環なので、1回作ったものを壊すのはもったいない。そのまま活用できるようなアイデアを盛り込むべきではないのかなと思っています。

スーパーシティは、島自体で独立した都市づくりになりますので、そういう意味では、海外のインフラ拠点としての都市モデルとしての輸出ができるような実験場にすべきではないのかと。これからの大阪は、人口減少するので、如何に過疎地を維持するか、その中では、かなり全自動交通であったり、オンラインガバメント、そういうものを入れていかないと成り立たない時代になりますので、そういう実験場として、前もって取り組むのがいいのではないかと思います。

そうした観点で、IRと万博は、今のところ別々に話は進んでいますけれども、ある程度2050年を見据えれば、どういうふうに融合していくのか、その中で、夢洲、咲洲、舞洲という三つの島をどういうふうに活用していくのか、どう実現していくのかというのも非常に重要だと思います。その中で、規制が問題になりますので、万博特区のような形で、地域一帯を規制のサンドボックスとして、何でもできるようにしていくことが、非常に重要だなと思います。

最終的に、この委員会の目標として、先ほど東京都にもありましたけれども、2050年の目標値を設定すべきだと思います。例えば、インバウンドが、何千万人に達するのか。これは、大阪だけで3000万人ぐらい、2050年だったら、言ってもいいのか

もしれない。3000 万人でも少ないかもしれない。ひょっとしたら、4000 万、5000 万。大阪だけでも迎える体制を作るべきだろうし、そうすると今の関空だけでなく、神戸と伊丹の大阪国際空港の話も視野に入れていくべきだし、もっと一体的な案自体も考えていかないといけない。橋爪先生の資料にリニアの話も出ていましたけれども、そういう鉄道網とかをしっかりと取っていかないと、やはり 3000 万人まで伸ばすとなるとなかなかできないなかなか出来ない。

あとは、域内 GDP をどれぐらい伸ばすかですね。

それから健康寿命ですね。今、75 歳ですけれども、例えば、2050 年思い切って、大阪府下では 85 歳を目指す。85 歳まで健康寿命を延ばすと生産年齢が変わりますので、そうするとかなり働き手が増えますので、かなり経済的な発展が期待できると思います。少なくとも、75 歳というのはですね、もう現実的な数字ですので、それをベースに大阪府下の経済をやらないと、働き手がないので、単純に移民とか、或いは東京から、地方からの移民をどうやって増やすかという話にならざるを得ないので、それだけではなくて、域内の方が働けるような環境を作る、しかも楽しく働けるということを考えなければいけないのではないのかなと思います。

どういう形で見せるかと、最後のポイントなのですが、今回、総務省の「未来をつかむ T E C H 戦略」ですかね、こういうアニメチックなのが非常に分かり易いと思います。政府が昔、安倍内閣の時にイノベーション 25 として、いのべ家の一日という漫画の本を出しましたけれども、少し見た感じで市民の方にイメージが湧くような、こういうことができるのだというのを、しっかり打ち出す提言がいいのではないかなと思います。

○橋爪委員（座長）

ビジョンということなので、見えてないことを可視化するのがビジョンですので、今ありましたが、85 歳まで働かないといけないという厳しい意見もありましたが。東京の事例でも「自由な発想で明るい未来を描いてみることは、都民の皆さんに勇気と希望を持たらすとともに斬新で夢のある政策の展開につなげる」ということが資料でも書いていますけれども、いくつかブレークスルーとか、過程を踏まないと、ただ、そこが、暗い未来社会を AI に支配されるような SF にあるみたいな未来ではなくて、明るい未来を描くということ。

このあと、50 音順にということなのですが、WAKAZO の京都大学二人は、「わ」ということで、50 音順の最後に。

○野村委員

森下先生のお話の最後の部分に関連して、差し支えなければ僕からお話をさせていただきますでしょうか。

○橋爪委員（座長）

いいですか。その後、また 50 音順に戻します。

○野村委員

野村でございます。時間も限られておりますので、令和最大の早口で進めて参りますが、よろしく願いいたします。

何事においても意識しているのですが、まずは大きな質問から始めたいと思います。さて、2050 マイナス 2019 は何たるか。答はもちろん 31 なのですけども、ここでまず、僕の半生を振り返りたいと思います。

1 枚目の写真。かわいいですね。といったところで、僕、1989 年、平成元年生まれなんですね。それで、日夜剣道に明け暮れて、地元の高校に入り、ちょっと悪くなり、ちょっと太り。なんとか東大に入って、最初は文一で法律を学んでいたのですが、法律は友人らに任せようと思いついて、文学部で哲学を齧り、その後、経済を独学して経産省に入りました。そのあと、多少調子に乗って、謎にキリッとして、今に至る。

この期間が 30 年なんですね。左上の可愛い赤ん坊が、こうやって成長して、皆さんの目の前に立っている僕になるまで、30 年間。ものすごく長いですね。

この 30 年間で、たとえば、経済・人口・技術と適当に切って考えてみます。バブル経済はタピオカブームに。65 歳以上の人口は、統計上のデータで、3,600 万人になりました。技術は、ポケベルからスマホへ。そう、30 年は本当に、滅茶苦茶長いと。

では、今回のワーキンググループのテーマになぞらえて未来を見据えてバックキャストしてみます。2050 年に向けてこれから 30 年間、時間を進めていったらどうなるか。すると、僕は僕の祖父みたいになるわけですね。

さて、それでは、たとえば経済・人口・技術といったものが 30 年経った未来でどうなっているのか。全然わかりません。一応、人口動態はかなり正確な統計とも言われているので、65 歳以上の人口が約 3,800 万人になると言われています。

これから人類が直面することの例ということで、巷でよくある議論を少しご紹介したいと思います。まず耐久消費財、たとえば車は、耐久年数が伸びていきますし、市場は飽和していく。ちなみに自家用車の保有台数は、およそ人口の 50% で頭打ちになると言われています。これからシェアリングがさらに一般化していく中で、自動車の年間販売台数は増えるのか、減るのか。また、自動車はご案内のとおり裾野がとても広い産業ですが、その関連産業がどうなっていくのか。雇用がどうなっていくのか。

また、言語の壁も消えていくとともに、コミュニケーションがどんどん簡素化していきます。昔は手紙であったのが、メールになって、ツイッターになって、LINE になって、Instagram、TikTok。いまはスタンプですが、ひいては色、音だけのコミュニケーションが主流になるかもわかりません。

3 つ目。対話とコト消費が遠隔で完結する世界。5G で 120 分の映画をダウンロード

するのに必要な時間、皆さんはどれだけかご存知でしょうか。120分の映画のダウンロードが、数秒になるんですね。この5Gが近い未来で実装される。ひいては、たとえば五感の再現性が中長期的に99%、或いは仮に、X%、90でも80でもいいのですけれども、飛躍的に向上したとしたら。その未来において、敢えて足を運んで観光に出向くことの意味とは何なのか、こうなると、観光ということを再定義しなくてはならない。

と、こういった議論は、実際は全然面白くないのです。僕ひとりで3時間でも5時間でもお話できますが、こういったロジカルな想定自体が、もう、意味がないとまでは言わないまでも、こういうことを考えている人は世の中に沢山います。

さきほどお話したように、30年間で何が起こるかなんて、全然わかりません。一応、「2050年の大阪のあるべき将来像」というお題を頂いておりますが、その答えは、「いまの我々では想像できない何か」なんですね。そこで、もうロジカルシンキングさようならと、コミカルシンキングでいこうと。これ、半分冗談で言っているのですが、()に書いてあることは本音で、AI時代というのは、「正しい」じゃなく、「楽しい」が大事であると考えます。「正しい」ことのかなりの部分は、AIが出来るようになる。人間が「楽しい」と思えることを如何に設計出来るかどうか。

未来が想像力の射程を超えていくということを考えたときに、我々、このワーキンググループ、ひいては社会全体として何をどう、議論していくのかというのが大上段の議論として存在しています。そこで、一旦、2020、2025、2050、仮に2100ということで、時間軸を引いてみます。社会でなされている多くの議論は①なんですよ。2020~2025まで頑張りましょう、みたいな。ちょっと進むと、よくわからないけれども、未来志向でいきましょうというのが②。③は2050だけを語る。④は2050までを見据えて議論をする。⑤は2100とか、とんでもないSFの世界だけをやる。これはもう、全然わからない世界です。2050からバックキャストして考えるにしても、これでも地に足が着いていない。そこで、2020~2025をちょっと超えたところに向けて、2100以降を見据えて、何が起こるかわからないままにバックキャストしていくということになるのではないかと考えています。

濱口秀司さんという一人の天才がいます。僕も彼に影響を受けて練習をしているのですが、意外にも議論されていない空白を見つける、というお話したいと思います。こちらのマトリクスは、2025、2050で、左右で象限を切って、縦を(かたちあるもの)と(かたちなきもの)、英語でtangibleとintangibleで切っています。

2025の(かたちあるもの)は、結構議論がしやすいです。会場、関連施設、商店、交通インフラなどなど。その上、2025の(かたちなきもの)は、記憶・物語を紡いでいく、産業を創出する・振興していく、文化を作っていく・繋げていくといったことと言えます。

ここで、2050年時点ではどうだろうかと考えてみたときに、(かたちあるもの)は結構そのまま結構繋がっていく、残っていくわけですね。その一方で、2050年時点の

(かたちなきもの)のかたちを描くのは、トートロジーですけども、本当に無茶苦茶難しいわけです。そこで、この部分をどう考えるかと言えば、もちろん、2050の会場とか関連施設の将来から相互に影響しあい、また、2025時点での記憶・物語、産業、文化とか(かたちなきもの)の延長線上にあるはず。そして突き詰めていくと、やはり一番大上段で多くの人と共有できるのは、「2100年の社会を作る人材を作る社会」のあり方に他ならないと思うんですね。論点がずれるのですが、2050年時点の社会を考えると、2100年の社会を考えられる人材を作れる社会になっているかどうか。これもトートロジーなのですが、究極的には、2200年の未来や2300年の未来を考える、こういったことが連綿と続いていくのです。

先ほど提起した、「未来が想像力の射程を超えていく中で、我々は何をどう議論していくか」という問いをリフレーミングしてみると、「未来とその先の未来をつくる人材をつくる社会をどうつくるか」なのです。もう一度言います。未来とその先の未来をつくる人材をつくる社会を、どうつくるか。もう、作りまくりまくりなので、クリエイティブにいきましょうと。僕はChief Creative Officerなる職務に就いておりますが、これを意識的に取り組んでいくということを提言したいのです。

もう一度、先ほどお見せしたスライドに戻ります。これから30年後の未来を見ると、僕が僕の祖父のようになっている。これが、さらに50年、つまり今から80年経ったらどうなるか、2100年になったらどうなるか。おそらくは墓の中なわけです。今回は「健康」「持続可能」「国際都市」というテーマをいただいており、各論は次回以降相当時間お話できるかと思いますが、これらがどうなるかわからないときに、これらをつくる人材をつくる社会をつくる。ここの大上段の視点を、この第1回において是非とも共有したかったものであります。これこそが、我々がこの「万博のインパクトを活かした大阪の将来に向けたビジョンワーキンググループ」であろうと思っております。

さて、ようやく本題ド真ん中の「2050年の大阪のあるべき姿」のお話を少しだけします。これはお好み焼きのコテ、ヘラなんですね。OKONOMICSと考えると、新時代の共創経済圏、まさにco-creationなのですが、お好み焼きは、具材がごちゃまぜになって、加熱される、熱を共有して、一つの器の上に形を成し、それをシェアするものです。大阪的な「おもしろいやんけ！」みたいなノリで、ともかくクリエイティブに、且つ共創していくみたいな非日常、若しくは日常の空間をつくっていくというのがいいと思ったのですけれども、思いつきなので、これは半分冗談なのですが、これぐらいロジック以上の何かが必要なのではないかなと。

ちょっとふざけて少しロジカルなお話をしますが、「なんかおもしろいやんけ」というメッセージをちゃんと打ち出していけないと、若者は多少なりとも面白い感じで、クリエイティブなものを打ち出さないと、ついてこないのです。

ふざけるなというお声もありそうなので、橋爪先生が座長をやってらっしゃる経産省の万博のワーキンググループでお話させていただいた際の資料がこちらに掲載さ

れております。適宜ご参照いただければと思いますが、ここでは、哲学的に、つまり真面目に存在論的な観点から色々書き綴っております。辞めて半年でこういった場に呼んでくれた経産省というのは、本当に器量が広いなと思います。

最後になりますが、1989年、30年前に東京に進出した有名な芸人を知っていますか。皆さんもちろん知っていると思うのですが、ダウNTOWNですね。それでは右の人、ご存知の方いらっしゃいますか。僕の同級生が、人類史上初めて、ロボットと漫才をするというのをやったんですね。このペッパーの中のAIを作っているのが、僕の仲のいい友人です。何を言いたいかというと、こういう人材を増やしていくと楽しいのではないかと思うのです。彼らはM-1グランプリで1回戦を勝って、2回戦まで進みましたが、これが滅茶苦茶面白いかというと、そうでもないのです。ただ、この中身を作っていた友人の天才が、本当に面白いのですけれども、なんて言っていたかということ、「奇をてらい過ぎると、コントに見えてしまう。だから内容は敢えて、オーソドックスな漫才で勝負をした」と言っていたのです。オーソドックスな漫才を、普通に、ロボットとやる。そこまで考えている。これこそクリエイティブだなあと思っています。限界費用ゼロ社会が訪れると言われていています。リフキン先生には僕もスイスでお会いしたことがありますけれども、結局、モノを作るコストが下がり続けていく中で、新しい何かをどうやって作っていくかということが核心であります。この右の人たちは、今、多くの人にとってわけがわからないと思うのですけれども、わけがわからないものをどんどん増やしていかないといけない。これが僕の課題意識の共有です。どうもありがとうございました。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございました。

○石川委員

野村さん、ありがとうございました。大変、面白かったです。正直、やりにくいところがあるのですが、僕は、彼の話聞いていて、意外と似てるなと思ったのは、何で僕はこの委員をやることになったのだろうと思った時に、ロジカルよりもコミカルシンキングがあって、東京の人に、大阪のことを馬鹿にされるのがものすごく、しゃくである。僕は8年前まで東京にいて、8年前に大阪に来て、こんないいところはない。楽しいし、仕事も規模も面白いし、いいサイズだし、でもなんか、過小評価されているなあと、これをどうしたらわかってくれるかなと、ずっと考えている8年間で、万博が決まって、東京のメディアも慌てながら大阪のことを聞き始めてきた。ということは今、過小評価をされる大阪を変えるチャンスじゃないのかなと、その時のキーワードをかなり今の野村さんに頂いたのかなと思っています。

マクロ経済専門と言いながら、実は7月1日からマクロ経済専門なので、実は、あまりマクロに詳しくないと言えばあれですが、じゃあ、何だろうと、大阪ってという

ところで、キーワードをばーっと書いています。僕はそこで、もっと大阪らしく自信を持って欲しいのが、万博2回やって、G20を成功させた地域というのは、多分、ロンドンしかないのです。そしたら、俺たちロンドンに負けてないよと、誰も大阪の人は言わない。これはおかしくないかと思うのです。

最近の大阪のちょっといい変化というのは、東京と張り合うということをやわらぐなくなった。アジアで輝くみたいなことを言うようになってきたので、大きく輝いていきたいなと、東京でつまらないと思っている奴をどんどん大阪に来てください。そういう街にしていくのではないのかなと。

さっき、野村さんの話であったのが、コミカルシンキングができる若い奴をどんどん集めていく。で、2100年を考えていく奴をつくっていくというのは、ものすごく理解できて、ここに書いていますけれども、オープンでインクルーシブな都市って、正にそれなのです。東京って、オープンというより、ちょっとロジカルな人が多い街なので、そういうロジカルではない、面白いことを考えられる人をどんどん集めていって、東京の枠に収まり切れなかった人をインキュベートできる都市にしていくということが、すごく大事なのかなと思っています。そういった意味で、野村さんの話というのは、結構、実はコンセプトが入っているというところです。

ちょっと、真面目な話をすると、やはり万博のテーマはSDGsなので、SDGsは外せません。もちろん、2030年までのテーマではあるのですが、SDGsというのは、今、みんなCSRと考えています。企業倫理、でも、せっかく大阪でやるのであれば、商売に繋げていかないといけない。SDGsを地場産業にしていく。SDGsで新産業を作るのであれば、大阪だみたいな、そういうブランドが増えてきたいなと。

そういう意味では、ユニバーサルデザインと心のバリアフリーみたいなこともありますけれども、そういったことができるのは、大阪しかないのかなと。その辺の詳しい話は、垣内さんにやっていただきたいなと思っています。

あとは、万博は2025年ということで、阪神・淡路大震災から30年経っているので、防災に強い街というのを目指していく必要があるのかなと、あとは未来医療の実験場ということでやってみなはれだと思っています。

大阪の多面性みたいなイメージをどんどん発表していったら、いろんな人が来てほしい。せめて、大阪って東西南北で違うイメージが発信できるフェーズになってきたかなと。北は、少し都会性みたいになってきたし、南は活気と人情だし、万博とかIRがくれば、西側が高級リゾートになっていくと思う。東大阪は、やはりものづくりとかそういうものがあるので、大阪の東西南北でイメージを発信していったら、この4つの軸だったら、誰もが幸せになれるような街になって欲しいなと思っています。

克服すべき課題とか、取組みの方向性という意味では、やはり広報戦略がすごい大事で、関西畿内での広報戦略と国内と海外の三つでやり方を考えていかないといけない。それが、まず大事かなと。

あと、万博とかIRとか2050年云々かんぬんとなった時に、大阪・関西の人材だけ

では足りない。世界中から、この大阪とか関西を愛してくれる人に来てもらう。本当にインクルーシブで、男性、女性、LGBT、ハンディキャップ有る無しに関係なく、みんなが集まって必ず、誰かが輝けるのですよという街になっていく必要があるのかなと思っています。それで、過小評価される大阪を変えて欲しい。東京の人にイメージを変えて欲しいなと思っています。

あとは、最近、万博に向けて勝手連みたいなのがポチポチ立ち上がっていて、その人達の意見をどんどん最大限入れていく。東京だったら、跳ね除けられる意見が、大阪であれば通るよねというふうになって欲しいなと思っています。

最後は、真面目に特区の積極的活用みたいなのも、ちょっと大事ですねということ、これが私の言いたいことなので、ある意味、野村さんのプレゼンに刺激を受けたところもあったところです。以上です。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございます。

○垣内委員

資料の中で、人口転出入の分布図がありましたが、東京に出ているというのがある一方で、障がい者や高齢者に限って言えば、東京に出るということはないのだろうなあと、何故かと言いますと、大阪の方が圧倒的に暮らしやすいからです。

どういった理由からそれを申し上げているかと言いますと、大阪のバリアフリーが一番進んだのが、1970年、前回の万博のタイミング、旧国鉄阪和線我孫子町駅に点字ブロックが設置されて、それから点字ブロックが普及して、1980年谷町線喜連瓜破駅に初めてエレベーターが設置されて、そこから駅のエレベーターというのが当たり前になって、駅のバリアフリー化だけで見れば、今、フランス・パリが3%、イギリス・ロンドンが18%、アメリカ・ニューヨークが25%、東京は昨年まで84%、大阪は、もう長年100だった。これほど外出しやすい街はない。といったことは、まず、数字を見ても明らかですし、また障がい者の実雇用率というのも、東京都と比べて今、高いといったことを鑑みると、障がい者、高齢者、多様な方が暮らしやすい街であるということは、しっかりとっていいだろう。

例えば、昨年、省庁の水増し問題があったように、障がい者雇用というのは、なかなか難しい状況にある。障がい者が働かない理由はあって、何故かと言えば、彼らに稼ぐ気がない。何故、稼ぐ気がないかと言えば、お金を使える場所もない。どこで食事ができるのか、どこで買い物ができるのか、どこへ旅行にいけるのか、「ああ、大阪なら。」と思ってもらえるような飲食店のバリアフリー化、ホテル、旅館のバリアフリー化、交通機関で進んできたそれをもっと他の面で、広げていく必要があるであろうと。

例えば、宿泊施設だけをピックアップして見ても、47都道府県でバリアフリーの助

成を行っているのは今、東京だけですから、これから IR、万博に向けては、宿泊施設、ないしは、それらを超えて飲食店においてもバリアフリーの助成をするなどといった新しい枠組みが必要になるだろうと。

例えば、兵庫の明石、泉市長が飲食店のバリアフリー化を進めていこうというところで、進めたことというのが、仮設スロープ、本当に板一枚ですが、そういったスロープを買うことに対する補助、また、筆談ボード、聞こえない方とのコミュニケーションをとるための、そうしたものを導入することも補助しますよと。飲食店のバリアフリー化で 100 万、200 万円補助しなくても、スロープが、筆談ボードといった、一つのツールだけでも十分に補助できることもあるだろうと。工夫次第で、いくらでもできることはある。既にバリアフリーが進んでいる大阪だからこそ、できることがあるのではないかと。

これらを見据えると考えるべきは高齢者でして、加齢に伴って見えづらくなる、聞こえづらくなる、歩きづらくなる。つまり、ご高齢の方のニーズというのは、障がい者のニーズを統合した状態にある。障がい者への理解なくして、高齢者への理解はあり得ない。多様性への理解もあり得ないということを考えると、今、せつかく進んでいるバリアフリーということをつるに活かした形でのまちづくりというのが必要になるであろうと。

今、1 位がウィーン、2 位がメルボルン、3 位が大阪。「世界で住みやすいまち」っていうところで認められている以上、既に東京は 7 位ですから、大阪の方が認められていると。25 年のタイミングでは 1 位に、50 年のタイミングでも当然 1 位にといった世界に誇れる、そんな大阪を新しく作って行けるといいんじゃないかなあということなんです。私からは以上です。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございました。

○嘉名委員

私は、2050 年考える時に、例えば、大阪府さんで今、例えば、未来の交通の話どうするかとか、このビジョンに関わる話もいっぱい検討があるんですね。未来を予測してっていう話もあるんだけど、それを正確に予見するのは困難です。先程、野村さんがおっしゃったようなところが私は、一番大事なかなと思ってて、やっぱり、未来に対して府民が共有出来るようなありがたい姿とか、共感を呼ぶっていうところ、実現したい未来が実が非常に重要なかなというふうに思ってます。

やっぱり、「これ、やってみたい」って思うっていう人が増えるっていうことが非常に重要で、そういうことに繋がるビジョンになればいいかなというのが一番大きいんです。そういう意味ではイノベーションとか、そういうものがちゃんと起きるっていうような環境をいかに作るかっていう、ところがポイントかなあということなんです。

ころで野村さんって次男ですか。

○野村委員

長男です。

○嘉名委員

長男ですか。私の資料では、ちょっとセカンドシティって書いてますけど、長男のように東京は首都として色んなもの背負うので、実は出来ないことってというのがいっぱいあると思うんですよね。ただ、次男坊であれば色々自由に出来るっていう、そういうところが重要なと。

大阪は多分、日本全国の中でも一番最初に人口減少迎える都市圏なので、大阪がやったことを見て、多分、東京圏、中京圏も動いて行くっていうことになります。そういう意味では、やっぱり、そもそも先んじるモデルっていう役割は国にとってもいいわけです。「健康まちづくり」というテーマでは、やはり、50年先や、2050年でも変わってないことっていうのは、人間はやっぱり、歩いているとか、動いているっていうことだと思うんですね。

ここでウォークブルシティというキーワードが出てきます。アクティブデザインっていう言い方もあります。ニューヨークはそういう言い方をしてますけども、健康で暮らせる都市をどう作るかって、それが日常の生活にどう影響するかっていうことですよ。

アメリカは今、3分の1の人がBMI30を超えてるといって、とんでもない状態になっていて、やっぱり、日常の暮らし方、生活っていうのが健康に大きく影響を受けるということですよ。

日本の都市では、そういう意味ではパフォーマンスいいんですけど、更にこれどう伸ばして行くかっていうことで、やっぱり、まちの形とか、まちの姿っていうのをどうして行くかっていうのが一つ重要なあというふうに思います。

そのことと繋がるのが、コンパクトシティっていうことです。持続可能性ということ言えば、大阪は非常に魅力的な部分もあるけど、じゃあ、どうやって次の産業を育てていくのか、それに伴う、土地利用転換を実現していくのか、それから、これからどんどん人口減って行くので、いたるところに空き地・空き家があるっていうことを前提に暮らして行くっていう必要がある。そういうところも考えないといけないというふうに思っています。

先程から皆さんの話聞いてると、例えば、私、30年前に、私は東京の方の大学に行って、最寄りの駅が東急電鉄の駅だったんですけど、自動改札が無かったんですよ。大阪で暮らしていると、電車って自動改札当たり前っていう感じだったのが、東京は改札に駅員さんが居ましたよね。だから、びっくりしました。「大阪ってすごいな」って。当時は思いましたよ。今や、ひっくり返されてますけれども、何かこう飛び抜け

たところがやっぱりあって、そういうところを、強みをどこに見つけて行くかということが重要と思います。

課題っていうことでは、ここでは、アクセラレーターとか、シンクタンクとか、アーバンデザインセンターというキーワード出してますけど、何か今までの考え方を変えるようなことを出来る、何か触媒になるようなものとか、提言出来るようなものとか、色んなものを繋げるような役割ってというのがこれから重要なかなあというふうに思います。我々、大学の分野で言えば、スタンフォード大学が D. school を作ってますけど、ああいうことを真面目にやるっていうことがとても重要なかなあというふうに思ってます。

未来と、その未来をつくる人材が重要。未知に対応できること。そういうことを役所が出来るのかということも含めて考えないと、2050年に自治体って残ってるのか。お役所仕事ってあるのか。みたいなことから考えると、お役所以外の何かがあるのかなっていうことです。それをつくり始めるということが我々重要なんじゃないかなというふうに思ってます。

それから、私の専門は都市計画なので、やっぱり、そういう先んじた世界を可視化する。あるいはちゃんと実際のまちに実装するってことが重要なかなと思ってます。万博の会場と、その周りだけが最先端なのではなくて、それが大阪府下の色んなまちづくりにちゃんと実装される。そうすることで、大阪ってというのは先端性を有すると。それが府民の元気に繋がるのかなあというふうに思っています。以上です。

○高橋委員

今日の大阪府資料の3ページの「2025年の設定」と私の資料の、下の方の「課題と取組みの方向性」のところ、2050年ってどう捉えるかということと合わせて考えてみました。大阪府資料にもあるように、かなり技術が進むので、かなりのものが機械で出来てしまう時代がくるのかなと思います。これまでの文明が、農業社会があって、工業社会があって、情報社会があって、まあ、他にも色んな言い方あると思いますけど、その先の社会が来るのだろうなと。それは、どういう世界かと思ったところに、4ページにある「万博の理念」というのが出て来たということかと思えます。実はこの万博の理念、テーマ、サブテーマ、あるいは未来社会の実験場は、どれもものすごく難しいテーマで、この解釈っていうのをしっかりやっ行って行かないと万博っていうのは上手くいかないし、その解釈っていうのは2050年とか、その辺を見据えた解釈をしていかなきゃいけないのかなあというのをちょっと自分なりに思いを巡らせているところです。

ただ、単純に考えると、今日も色々出ていました、元気とか、幸せとか、楽しいとか、この辺の何か人間が生きる方向性、幸せになる指標っていうのが来るのかなあと思えます。技術が色々社会・経済の問題とかは解決しますので、そんな風になるのかなあと思ったりします。

一方で、「そう単純にそこまではいかないよね」というのと、人間どうやって生きて行くのだっていう話もあります。今後の可能性として、色んなものの組み合わせみたいなのを考えていかないといけないし、違うものの組み合わせみたいなのを考えていかなきゃいけないかなと思います。最近、リアルとバーチャルの融合、デジタルツインとか言われますけど、ここら辺もやっぱり、しっかり考えていかなきゃいけないということと、あと、有機と無機と言いますか、生物由来のもの、生物由来じゃないもの。これが何か上手く組み合わせると、新しいことが起こるのではないかとか、あるいはそのマトリックスとかですね、何かちょっとそういった発想もいるのだろうかということや、技術とどう折り合って行くかということかなあと思っています。

KPIの話も先程出しましたが、子どもが元気になるというような単純でないですけど、複雑なのですが、そうしたKPIを設けるっていうのも面白いのではないかなと。やっぱり将来を担うのは子どもだと思いますので、特に、前回の大阪万博では、私も5歳だったので、それでも印象はすごく残っています。あの時、世界っていうのを感じたというのは肌感としてあります。そういったことは、やっぱり大事なのかなあと思っています。

あと、色んなインフラの課題とかがありますが、大阪周辺でプロジェクト進んでいますので、そういうのも使い倒すというのも発想も大事だろうなあと思っています。新しいものを作る体力が無ければ、使い倒すというところをやって行けたらなあとというふうに考えています。

本題のところで、「じゃあ、テーマどう考えるの」という辺ですが、大きくはやっぱり、「Well-being」っていうのは、いい言葉だと思いますので、これをどう日本語訳するかは非常に難しいものですが、ただ、大阪はやっぱり、人がいっぱい来て、物がいっぱい回ってというようなまちだと思いますので、そうするには、皆が元気で、幸せっていうのを表現して、人が訪れたいくなる、あるいは訪れるまちっていうのが展開されて行くのかなあと思っております。

私の資料の残りは、いただいたキーワードで自分なりに整理したものですので、また、御覧いただけたらなと思っておりますが、まあ、大体、普通のことしか書いてないですが、一つは、「食」っていうのをちょっと真剣に考えたいなあとというようなところと、今回、夢洲で万博行われるってことはやっぱり、「西日本と連携しよう」というメッセージだと思いますので、瀬戸内、そしてそれはアジアにも繋がる。という発想は大事かなあとすることを思っております。以上でございます。

○橋爪委員（座長）

ありがとうございました。それではWAKAZOの方。

○川竹委員

同じ資料を二人で説明させていただきます。よろしくお願いいたします。WAKAZOという

のはですね、「大阪・関西万博を若者から作って行こう」と設立して、元々設立背景としては2016年の万博誘致活動の際にですね、行政が設置して下さった民間の構成メンバーの方の構成年齢が65歳以上だという実態を知りまして、2050年、2025年、2020年っていう、先の未来を描いて行くテーマの大阪・関西万博にもっと若者からも責任を持って関わって行きたいという思いで、ずっと万博の誘致活動に関わって参りました。今回、2050年の大阪の将来像というものを考えた時に、一つポイントとなるのが私たちとしては効率や物質的な豊かさを重視するその価値観というものが、個人の幸福や生き方を重視する価値観に移っていくのではないかと。そのような位置付けから今、高橋様のキーワードとも同じですけれども、「Well-being」ということを追求する社会がやってくると私たちWAKAZOとしては考えています。

そこで、大阪という都市が世界を惹きつける魅力を持ち続ける都市である時に、大阪が強みとしてもっている医療・ヘルスケアが提供するものを、病気の予防・治療だけの「健康」という概念から主観的な幸福も含む「Well-being」というものに拡大して、追求していくことが大切であると考えています。これまでの医療・ヘルスケアというものを考えた時に、感染症の克服による抗菌薬の開発化された時代から始まって、1分、1秒でも長く生きる健康長寿を追求する時代がやって来ているなど。

これからAI、テクノロジーの発展、スマートシティの推進等によって、「個別化」された、「自動化」された医療が提供出来るという時代が来た時に、やっぱり私たちがそこで追求出来るのは、一人一人が主体性を持って社会と個人の「Well-being」を追求して行くこと。それを万博を契機として達成して行くことが、「いのち輝く未来社会」につながるのではないかと考えています。

大阪の強みである医療・ヘルスケアを活かして、「Well-being」を牽引する持続可能な国際社会となる時に、今、大阪が持っているアート・ライフサイエンス・テクノロジーの融合を通して「Well-being」これを私たちは個人のクリエイティビティとコミュニケーションが最大化された時に「Well-being」というものが達成されるのではないかと一つ考えまして、そのような観点から下記の3つのことを必要だというふうに考えています。

まず、アート・ライフサイエンス・テクノロジーに、若者が持つクリエイティビティとコミュニケーションを掛け合わせて行くこと。そして、若者が触媒となって行くことで、「健康」という概念が「Well-being」に醸成されていくきっかけをつくっていくことが出来るのではないかと考えています。

例えばですね、ライフサイエンス・テクノロジーと若者が掛け合わさった場合、AIによって自動化・個別化されたヘルスケアプランが提示された時に、やっぱりそこは無機質なものであって、5年後、私が自分が医者になった時を想像した時に、それを患者さんに、そのまま提供出来るかという、やはりそこに私は違和感を感じています。それを一人一人が納得出来て、且つ楽しんで、実践していくものになる為には若者の遊び心だったり、そういうクリエイティビティが掛け合わせていくことを大事で

はないかと思っています。

二つ目はですね、そのクリエイティビティを主観的幸福感をどういうふうに醸成して行くかというところにあまりにも「自分にとっての幸せっていうのは何なんだろう」というふうに、問題提起というのが、これからの時代、SDGs の課題解決のその先は何かと考えた時に、やっぱり、問題提起をして行くっていうことがとても大事じゃないかと思っています。やっぱり、若い人っていうのは、今、本当にこの会議、高齢化ということが問題になっていましたけれど、若い人にとってもその先の人生っていうのは、まだまだたくさんある中で、高齢化だけでなく、その先の 30 代、40 代をどう輝かせて行くかということもすごく考えるんですね。そういう若い人々の純粋な問いかけに、言葉を社会の中で「自分にとっての幸せとは何か」という問題提起のきっかけというものを与える。要は、主観的幸福感を醸成する「装置」のような役割を若者が担って行くことが出来るのではないかと考えています。

二つ目ですね、人の「Well-being」というものが醸成されて行く時に、更にそれに触発される形でアート・ライフサイエンス・テクノロジーのまた新しい人に寄り添ったものに変化して行くことが出来るのではないかと考えています。その為には、例えば万博会場で新しく開発された技術・テクノロジーのところに、まず「議論の場」というものをすごく近い距離で設置することが大切だと思っていて、そのような場を大阪の関西万博の会場に設置できればというのが一つのアイデアです。

○ 薬王委員

最後の 3 番のところでですけど、「Well-being」というのが、これから 2050 年ということを考えるっていうテーマですけども、それは野村さんの話にもありましたけど、やっぱり、2050 年考えたところで、また、その先の未来を考えていかなければならないというところで、いかに常にその先を未来を考え続けるような都市をいかに、まさに持続可能性を持った都市をいかにつくるかというところが、非常にキーポイントになるのかなあと思ってます。

嘉名さんが居る前で、都市デザインの話をするのはちょっと恐縮なんですけど、エピジェネティックっていうところがキーワードで少し営業してまして、何かって言うと、元々大阪万博にとって、メタボリズム、代謝をモチーフにした都市を作ろうっていう話があったんですけど、これからは、まさに代謝と共に実際にそれを受け継いで行くエピジェネティックっていう、医療の概念なんですけども、実際に、自分の遺伝子だけではなくて、環境の変異を受け継ぎながら次代にどんどん繋げていくと、そういったようなかたちを含めたソフトを実際にハードの面でも体现出来るような、そういった大阪を都市にしていかなければならないのかなというふうに思っているところです。

また、「Well-being」というところがキーワードとして僕らとしては挙げてるんですけども、この「Well-being」というのが、実際に SDGs の次の課題として挙がっ

た時にポスト SDGs として「Well-being」をどのような「Well-being」を達成する未来とは、どういう課題があるんだろうというところの新たな指標作りというところが非常に大きな観点なのかなあと考えています。

また、実際に若者が触媒として、常に大阪を新陳代謝し続ける、そういった都市にするためには、やはり若者が常に入れ替える、主体性を持って活動し続けて行く。そのような動的活動。そういう若者が集まって来るような刺激的な大阪であるべきなのかなあというふうに思っています。

そういったところも踏まえて、実際に若者自体がですね、主体性を持って色々やれるようなところの舞台があればいいかなと考えてます。

またそれがこの今回の万博を契機にして、また、中之島の再開発、うめきたの再開発、この3つをトライアングルで繋ぎながら、実際に大阪の中で循環しながら若者が、もう、しっちゃかめっちゃかに「やってみなはれ」精神を更に推進して行けるような大阪になれば、若者自体は興味を持って大阪に、何かしたいなら大阪に行こうというような情勢、機運が出来上がって来るのかなあと思います。

また、テーマとしてはアートもライフサイエンス・テクノロジー共に入れてみすけども、やはりこれからの未来 2050 年以降の未来を考えていく上で、やはり問いを問う、問いを立てるというところがアートの一番の根本の重要なところではないのかなと考えてます。課題解決の思考としてデザイン思考というところがずっと言われ続けて久しいですけど、デザイン思考というのは基本的に課題を解決するフェーズなので、いかに課題を見付けるか、作り出すかっていうところにおいてスペキュラティブデザインというような観点から、実際にそれを体現出来るような大阪になればいいのかなあというふうに思っています。以上で終了させていただきます。

○橋爪委員（座長）

最後に私から、2050 年に向けた考えを述べたい。お手元のペーパーにございますが、地域が魅力的であるっていうことは、そこに憧れを多くの人が抱き、そこに希望があり、そのまちで暮らせば何らかの評価を得られる可能性がある、チャンスがあることが重要であると思います。

私は大阪のミナミの育ちですが、「何人か」と聞かれると、「日本人」というよりも「大阪人」ということにしている。ルーツは色々だけど、大阪で暮らす人の多くは「大阪人」であることを誇りにしている。私の父親は三重県、伊勢志摩の出身であり、母方は京都なんですけど、祖父と祖母は能登半島の出身。大阪で私が生まれるわけです。大阪の本質は、様々な土地から様々な目的と、様々な夢を描いて人が集まり、新しい価値を生み出してきたことにある。様々な人たちがそこで出会い、合流し、新しいビジネスないしは新しいアイデアを生み出す。そこにおいて、一つの形として雑多な文化が生じた。または大阪の特徴のいまひとつの特徴として、「面白い」という価値が

本当に高く評価される。ユニークネスということなんですけど、笑いにつながる面白さに限らず、この人は他とは違う発想がある人を「面白い奴」と言って、高く評価する土壌が元々ある。

決まりきった枠の中での議論ではなくて、新しいアイデアの土俵を作っていくことが大事だと考えます。これは研究においても同様です。新しい何かチャンスがあるから優秀な研究者が集まる。拠点があっても、そこに集まりたい人と考える優秀な人材がないと、優秀な研究成果は出ない。いっぽうで、「住みやすい」という点も大事な要素。なによりも、住みやすいまちは憧れを喚起します。たとえばアメリカで住みやすい都市のランキングで上位に絶えず入って来ているポートランドとかは、住みやすさを背景に、近年、多くの企業が本社を移しています。「住みやすさ」は、都市への憧れを喚起する大事な要素であると思っております。

ペーパーをご覧ください。「前提となる考え方」として4点を書きました。大阪府の原案では、あきらかに抜け落ちている視点として、2050年の世界の大状況をまず把握するべきだということを申し上げたい。

そこでまず1点目は「世界人口 100 億人の時代」。生産人口がこれから伸びるベトナムとか、人口ボーナスがあって内需拡大する国々はまだありますが、いずれ順次、少子高齢化の時代を迎える。だからこそ持続可能な開発が世界的に求められている。今後、世界人口がピークを迎え、増加が緩和される状態が顕在化するという想定の下に議論がなされるべきだと考えます。

2点目として「平均寿命 100 歳の長寿社会とテクノロジーの進展」。平均寿命 100 歳の長寿社会になると日本では喧伝されていますが、それも国によって、時間差があることを意識するべきだと思う。我々は先行して少子高齢化の時代を迎えるので、一定アドバンテージがあるはずだと思います。ロボット・AI とかによってライフスタイルが変わることにしても、世界で見ると地域差がまだまだある。我々は、日本国は、先にさまざまな技術を社会に実装化することになると思われる。

3点目としては、「真の国際化の時代」。世界が少子高齢化を迎える中で、だからこそ人の流動性が高まるであろうという点。国連機関も指摘している重要な論点です。たとえば現在のドバイなどがそうですが、国民は2割ぐらいしかいない。そのほかの8割の人たちは世界各国から出稼ぎの方々になる。外国人労働者で国が支えられているわけです。

今後、日本においても移民とかの話ではなくて、多くの方たちが交流するような社

会が実現するであろう。だからこそ我々は、多様な人たちを受け入れなければならない。観光客だけではなくて、ビジネスマンであろうが、単純労働者であろうが、様々な目的で国境を越えて移動する人が益々増えることは間違いない。

そこにおいて我々は、そういう人たちを受け入れるような地域になるという意識が必要。国籍だけではなく、ありとあらゆる人たちを受け入れる地域が、憧れの的になると思います。

私の父親は志摩の国から出て来て、母方は能登の国から関西にでてきたのですが、それがグローバルな人の移動になる。江戸時代からの大阪の後背地は、西日本及び北陸でした。多くの労働力が各地から大阪に入ってきて、大阪の繁栄を支えた。今後は、その種の人流が、いっそうグローバルになると考えられます。

4つ目の大状況としては「メガリージョン間の競争激化」。世界中に巨大な人口集積地が続々と生まれつつあるなか、それぞれが多くの人を集めるビジネスの起業や、教育振興や研究集積などを競い合っているという認識。そこで我々は他の地域における構想を意識するのかどうか、特に我々の得意技を磨いて、ある分野に特化するのかどうか。そうしなければ、メガリージョン同士の競合の中で存在感は示せないだろうと考えます。

要は、2050年の世界の大状況を、我々は前提として一定共有しながら、それを日本の状況、大阪の状況に落とし込むということが必要だと申し上げたい。ビジョンに書くかどうかはさておき、大事なことだと思う。同時にベンチマークとする都市や地域を想定するのか、世界の中での役割分担を考えるののかも、検討課題としたい。

○橋爪委員（座長）

次に、2050年の大阪に求められることを述べてきたい。5つの柱立てをしました。

一つには「課題先進都市」から「課題解決先進都市」への転換。将来の語り方を変えたいということです。私たちは課題が多いところから論じ、何とか解決しなければいけないと語りがちです。そうではなくて、今後、世界人口が増えて行く中で少子高齢化が各地に広がるのであれば、私たちの試みは世界的に先行してるモデルを示し、新しいソリューションを我々が生み出す。課題先進地ではなく、「課題解決の先進地」になるという覚悟が必要であろうと考えます。たとえば、これはスマートシティの分野で先行してるデンマークは、すでにこの発想に立って、課題解決の先進的な試みを図っていることで知られています。

私たちは、大阪・関西万博で示されるであろう「Society5.0」のモデルをまず府下に実装して行くということから始めなければいけません。様々な分野での課題解決のシステムを他地域、他国に先駆けて、我々は実践してゆく。たとえば、さきほどもありましたが、震災に対する備えというか、防災という領域では、我々は、先進的な経験知を得ています。十分に先を走ることが出来るだろうと思います。

2つ目は「誰もが自己充足を感じる社会の実現」。万博で示されるであろう「いのち輝く未来社会」は、まさに誰もが自己充足を感じるような持続可能な社会のモデルだと私は思っております。また多文化共生・社会的包摂を実現する次世代の教育モデルも必要だと思います。また都市空間においてはウォークアビリティとか、アクセスアビリティとかが重要。それが環境やウェルネスに配慮した高質な生活空間の提供に繋がっていく。さらにいえば、「誰もが自己充足を感じる社会」こそ、住みやすさの本質に繋がると思っております。

3つ目としては「国際的な共創を促進する社会基盤の整備」。万博のコンセプトに記載した「共創」、CO-CREATION という方法論をいかに大阪で次世代モデルとして展開できるのかというものが、必要であろうと考えます。

4つ目には「東名阪スーパーメガリージョンの優位性を高めるための基盤整備」。国際的なスーパーメガリージョンの競争を想定する場合、関西圏の独立性、ユニークネスを高めることが大事だと思いますが、それに関連する基盤整備をしていかなければいけない。冒頭、事務局からありましたが、高度経済成長に作った基盤を、これから更新する段階に入る。そこでは従来型では不十分であり、次世代モデルが求められる。インフラの更新にあっても、新しい概念を考えながら進めて行かなければいけない。

あと、大阪・関西圏の最大のユニークネスというのは、歴史性や文化的特性だと思いますので、この辺りを上手く活用して、展開することは必要だろうと思います。

最後に「大阪・関西万博のレガシーの活用」。2025年大阪・関西万博だけではなくて、70年万博は人類の進歩と調和を掲げ、90年花博では環境や緑化に関して新しい可能性を示しました。今から30年後だと、花博から現在までの変化になる。1990年から2050年の中間に、現在があるわけです。2050年は、かなり先のことだと思われがちですが、実は飛躍だけではなくて、過去や現在と繋がっている部分がある。まずは1970年から1990年、2025年、2050年までを貫くような概念の整理をした上で、SDGsネクスト、SDGsビヨンドに向けた施策の展開を実施していくことが必要だと考

えます。

○ 橋爪委員（座長）

ということで、委員の皆さまからそれぞれ意見をいただきました。今 11 時半ぐらいですので、11 時 50 分ぐらいまで時間を取りたいと思っておりますので、追加で意見、あるいは他の委員の方のコメントに触発されて何かございましたらお願いいたします。

○ 野村委員

先ほどはお話しなかったんですけど、Wellbeing を再定義する財団、LIFULL 財団というののメンバーもやっております、先日の経産省のワーキンググループでもお話をさせていただきました。我々は Wellbeing について理解を深めるために勉強が必要です。たとえば、僕も知らなかったのですが、世界幸福度調査って、誰がどうやってどういう基準で幸福度を計っているか、意外に皆知らないんです。米国の Gallup という会社が、168 か国に主に対面で質問を投げかけているんですね。

もちろん質問項目がいくつかあるんですけど、すごくざっくり分けると、「あなたは昨日、これらのポジティブな感情 5 つを感じましたか」で、「Yes」or「No」。例えば「よく休めた」とか、「尊重されていると思えた」など。次にネガティブな感情で「疲れましたか、悲しかった」など 5 つ、「Yes」or「No」。あとは、「0 から 10 であなたの人生を評価してください」と。

高橋委員のお話はすごく面白くて、『生物と無生物のあいだ』という、福岡伸一先生の非常に有名な本がありますけれども、僕は大学時代に存在論哲学を専門にしていたのですが、あの本は、西田幾多郎哲学に影響を受けてるんですね。福岡伸一先生は、そのテーマで別に一冊の本を書いているほどです。

西田幾多郎の同級生で、地元を同じくする鈴木大拙という仏教哲学者がいて彼も東洋的なものを説いているのですが、西田や鈴木「絶対矛盾的自己同一」という考え方が非常に面白い。西洋哲学は、デカルト以降の文脈では、主体と客体が存在する、つまり、「対象化して、それをどうこうしてやる」というのが、科学の発想なんですよ。一方で、この主客の分離それ以前の「全」ないしは「無」として受容して考えるというところに大きな哲学的示唆があるわけです。

先ほどの Wellbeing の議論に戻ると、本当は、この関西圏から提起できる部分も大きいと思っています。京都学派もあり、先ほどのお話にあったように、大阪もダイバーシティ、インクルーシブネスが高い。我々の財団とも連携出来るかなというのが所感です。

垣内委員のお話を聞いていて、ものすごく反省というか、「当事者を当事者として規定するものが何なのか」もしくは「当事者ではないというふうにしてそれを超える何かがあるのか」といった議論が非常に取り扱いが難しいと感じています。僕は今、東大卒の

元経産官僚ということ为前提に若手として放談しているわけなんですけれども、本当はそういうポジショントーク自体が間違っているのだろうと。古い言い方をすれば強者のロジックだし、だけれども、そこに対して何か包摂しようというふうな作為性自体が非常に権力的なので、こういったところも含めて、課題意識のシェアと反省の弁でした。

○ 橋爪委員（座長）

はい。ありがとうございます。その他は。

○ 高橋委員

今話を聞いていて、「禅」とかですね、そういった文化的なものは重要と思います。特に今回、万博会場にある「空（くう）」という場所は、まさに「禅」から来る言葉だと思いますので、おっしゃるように、そうした空間で「Well-being」を上手い形で表現出来る場になれば面白いかなと思います。日本らしいところで、多分、西洋から来たら「何じゃこれ」ってなるかも知れないですけど、刺激はあるような気がします。すごいヒントと思いました。ちょっと、万博の話になっちゃいましたけど。

○ 野村委員

具体論に入っちゃうと結構、面白くて、Courseraというe-learningの最大規模のプラットフォームの一つがあるのですが、2018年時点でWellbeingがランキング3位だそうです。気を付けなければいけないのは、Wellbeingという議論自体が既に世界的にトレンドになってきていて、2025年にはそのトレンドに乗っかる形になってしまいがちです。したがって、SDGsの後を考える時、Wellbeingにのみ引っ張られるのはたぶん違って、僕の個人的な直感値では、さきほど申し上げた主体客体の別の超克、脱構築に近い形で、何かが見えてくるのかなと思っているのですが、その議論の仕方がそもそも分からないなというのが、今の自分の限界だなと思っています。

○ 垣内委員

いただいた資料の5ページにある国際都市。これは一つ誤字なんですけど、心のバリアフリーってなってる所が、バリアフリーだとは思いますが、これは誤字があるという話じゃなく、そもそも「2050年までにこの言葉を置いておくのか」ということとして。オリンピック・パラリンピックの時から言われてるんですね。これ、バリアフリーって。組織委員会のアドバイザーということで私が就任したのがオリンピック・パラリンピック決まってすぐだったので14年だったと記憶してますけど、20年の時に「心のバリアフリー」を推進するということの内閣府の方も言い出して、東京都の方も言い出して、結果何やったかって、何もやってないですよ。ボランティアの10万人の育成プログラムだけは作ったものの、それ以外たいして進まなかった。

これは想定の内と言いますか、「2、3週間のイベント×2の中で、そんなに社会は変わらないだろう」というのは、つくづく思っていましたので、それは前回の東京の、1964の時も首都高こそ出来たもののみみたいなところがありましたから、そこまで進まなかった。

話戻って「心のバリアフリー」ということは、わざわざ言葉として表現する必要はなく、そもそも同じ時間を共有することで、向き合う機会を増やすことで勝手に進むことなので、わざわざこういったことを挙げてること自体がナンセンスになるのかも知れないなあというのが、2050年を考えた時に思うところですかね。

○ 石川委員

すいません、高橋さんのレジュメの中で瀬戸内海・日本海との連携で魅力拡大とか、あとは橋爪先生のレジュメの中でも、東名阪スーパーメガリージョンの利便性を高める。その通りだなあと思っていました、やはり、大阪って、大阪府だけで完結しない存在であって、やはり皆何を期待してるかって言うとやはり関西全体になったり、西日本全体のリーディングの存在であると思うので、やはり、私もこの中心、西日本のいうことがあったと思うんですけども、やはりそれぐらいちょっと高い次元で考えて行くっていうことが。この勉強会でどこまで言うかはあれですけど、2050年になったら本当に市町村、都道府県の合併とか、道州制みたいな話も出て来る可能性があるもので、その時にやはり、まだ我々考えてる大阪府という次元ではなくて、少し大きく考えて行く、メガリージョンって言うか、そういう発想はある程度強く出して行く必要があるのかと思います。

○ 垣内委員

資料の19ページにありました社会資本の老朽化。社会資本についてこれで行くと、かなりインフラ的な所が取り上げられている。エレベーターに関しても老朽化がかなり進んでおりますので、先程、例に挙げた喜連瓜破駅のエレベーターも2016年の時点で高校生が閉じ込められて1時間といった問題があったように、やはり30年もすれば大体エレベーターは古いですし、旧式のエレベーターは音声案内が付いてないということで視覚障がいのある方が「今、何階に居るか分からない」「どちらの扉が開くか分からない」といった問題もある。「最新型のいいエレベーターを増やせ」と言ってる訳ではなく、古いものをやっぱり順に変えていかなければいけないだろうと。スロープ、多機能トイレ、エレベーター、点字ブロック。そうした諸々のことも今、大阪にとっては日本においては大きな社会資本だと思いますので、先人の方が築いて来られたそれらをしっかりとメンテナンスして行くっていうことは大切であろうと。

あと、点字ブロックという形自体に関しては、これは万博エリアでは提言してることですけど、大阪府全体でも考えて行くべき事柄だと思いますが、「そもそも点字ブロックでいいのか」ということですね。やはり、ご高齢の方の転倒事故が、かなり多

く報告されてることを考えると、点字ブロック、視覚障がい者には必須。でも、「車椅子ユーザーは。杖をついてる方は。ベビーカー押してる方は。」と考えるとやっぱりそれはバリアになっていると。「みちびき」が打ち上がって以降、数センチ単位の誤差で移動は出来る訳なので、点字ブロックに依存しない形での GPS または 5G。色んなもの駆使すれば、スマートフォン一つで色々出来るっといった仕組みを考案して行けると思うので、そうしたテクノロジーを活かした新しいバリアフリーというのを日本で一番初めに、長きに渡りこれだけバリアフリーを進めて来た大阪だからこそ、新しい事例というのを 25 年、50 年には示していけるといいんじゃないかなあというのを思います。

○ 橋爪委員（座長）

今、ご指摘あった心のバリアフリーもそうですが、現行使われてる言葉や概念がもはや 2050 年にあっては、当然のことになっていたり、時代遅れになっていると思われれます。エピジェネティック都市という提案もありましたが、新しい概念、新しい言葉を、いくつも発明しなければいけない。ただ新たな概念を用いた場合には、それに対して説明を求められた時に説明できるように、「これはそれはそういうことだ」と我々で定めていかなければいけない。

私は、大阪で先行して取り組み、先進的になった事案や個性を更に伸ばして行くことが重要だと思います。今日ご意見あった中でとても大事なことだと思います。

たとえば、他では出来なかった、あるいは大阪だからこそ出来たことも、さまざまにあるかと思えます。たとえば近年、世界中の都市が自動車社会から脱し、歩行者優先で都心再生をしている。「ウォーカブル」なまちづくりが重要だと言われてますが、大阪のミナミは、面的に地下道と商店街、歩行者専用のエリアが、驚くべき総延長で早くから確保されていた。世界の成功事例と比べても、はるかにはやくから実践しているのだけど、それを今日の視点から再評価して「ウォーカブル」だというふうに言わないですね。私たちは「歩きやすいまち」を、世界の他都市よりも早くから実践しているのだけれど、それを「歩行者空間を面的に展開した」ということを、強く訴求する概念がなかった。要は自らの特徴とか、伸ばすべきところを評価する概念とか言葉が必要。また 2050 年に向けた新しい目標を作る時も、従来の言葉ではなかなか表現をし切れないというところに工夫の余地がある。

ビジョンには哲学的な概念も入れていかないといけないと思います。先程あった「空（くう）」は、私がかかなり強調して万博の会場計画に取り入れれました。中心が空っぽであるというのが日本的な中心概念である。広場のあり方が高密度な場所ではなくて、空っぽであるからこそ色んなものが出会い、混じり合うんだっていう発想。1970

年の大阪万博では中心に「お祭り広場」があった。それを現代から未来に向けて考えるべきだと考えて、「空（くう）」を提案した。中空の「空（くう）」なんですけどね、もう一つは西に向けたゲートが、上方に広がっている。世界に向けたゲートであるというのが私の思い。「雨が降った時どうするんだ」と言われながらも、オープンエアであることの意味合いっていうのをですね、積極的に考えるべきだと思います。場所に対する新しい概念とか、新たな意味を持たらすということが私の中では大事だと思っております。今後、ビジョンの策定にあっても、様々な行政の施策の中でこれまでの特徴を伸ばすべきところ、あるいは 2050 年にはここまで進んでるべきだという前提に拠る発想の飛躍、双方のご意見があれば、うかがっていきたいと思います。

○ 薬王委員

今、橋爪先生の話もそうですけど、結構、高橋先生も大きな変遷の部分で、やっぱり、捉えていかなきゃいけないところは結構、キーワードかなと思ってまして、オムロンさんが言ってる SINIC 理論というのが、皆さんご存知かなと思いますけど、技術とアート、社会がどんどん互いに影響しながら発展して行くと。

その中で情報社会については自律化社会になって、で最後は自然社会になってと、いうふうには言われてますが、やっぱりその中で、ただとは言え「今から 50 年後、100 年後を見通せるか」って言うと、非常に極めて難しいとっていて、僕ら若者で何か割と未来に鋭敏と言われながれでも、それでもやっぱり、10 年、15 年後どうなってるかと言うと、やっぱり、なかなか見い出せないなっていうところがあるので、その観点から言うと、結構もう常に、その時点、その時点でいかに問いを自動的に自己発展的に作り続けれる、そういうシステムをいかにこう都市空間、大阪っていう所の中にシステムとして、仕組みとして組み込んでいくのかとこのころの、まさに何て言うか、自浄作用じゃないですけど、自分で自立的に都市として動いて行けるというところが結構、今後の 2100 年の人材を作るというところでは常に未来、未来を作る上では絶対重要な観点なのかなというのが野村さんの話を聞きながら少し思ったところですよ。

○ 川竹委員

もう一つやはりライフサイエンスをどう使うかということはまだ少し考えたいなとは少し思いまして、ライフサイエンスをテクノロジーと組み合わせることでヘルスケアを進めて行くということも一つあると思うんですけど、先程、野村さんもおっしゃったように例えば福岡伸一さんのやっぱり、新しかったところの人文系の所にライフサイエンスの時系を組み合わせられた時の、こう新しい人間観みたいなのが提案されたっていうところがすごく斬新で衝撃を受けたと考えた時に、例えば「Well-being」っていう考え方に人文系だったり、心理系の考え方でなくて、ライフサイエンスから得られる治験、例えば本当に細胞の体質っていうのが、互いと互いの細胞が繋がる力

であったり、自分に自立的に生きて行くって、そういうそのミクロな細胞がどれだけ私たちの人間というマクロの存在になった時に影響出来るかは分からないんですけども、そうやって色んなヒントが隠されているんだと思っているので、それをテクノロジーとの融合だけでなく、色んな分野との融合をして行く在り方っていうのをまたちょっと難しいんですけど、私達で考えて行けたらなというふうに思います。

○ 野村委員

そういう意味では、少し別の視点を提供すると、多くの方がハッピーな話をしたがるのですが、僕はド真ん中から「高齢化の核心は何か」とずっと考えてて、結局本質が何かといったことはまだ分からないのですが、ファクトとして、死者の絶対数が増えていくんですね。したがって、「死の受容のあり方」は哲学的課題として扱う必要があると。

村上春樹が書いていましたが、「生の対極としての死」ではなく、「生の一部としての死」といった議論。「死とは何か」ということを真正面から考えること、世界でいち早く求められるだろうと。

あいまって、「死」でなくとも、いわゆる認知症や介護の議論もあります。「認知症は病気なのか」という議論ももちろんあります。いまは認知症のアミロイドβ仮説は揺らぎつつある中、いわゆる医学としてこれからどう対応していくのか。社会受容なのか、そもそも社会受容という言葉が正しいのかといった議論もあります。「いのち輝く」を考えるのであれば、こういった問いをきちんと取り扱う必要があるのではないかとずっと思っています。

全く真逆の話をする、嘉名先生のお話、僕は無茶苦茶同意で、d. School みたいなもののさらにその先を作るということ。そのデザインシンキングやロジカルシンキングといった思考のフレームワークそのものは、年々色々と提案されていく中で、なんちゃらシンキングじゃなくても何か編み出す場を作らないと人は集まらないです。既存の大学で「こんなコース作りました」というのは、自然に進んでいく。なんと言うか、とんでもないものを皆でぶち上げないといけない。今すぐ着手して2023 ぐらいから本格始動するぐらいじゃないと人は集まって来ないのでは、ということも感じております。

○ 橋爪委員（座長）

その他のご意見もあるかと思いますが、時間もきております。最後に一言、テーマに「デザイン」という言葉を掲げた国際博覧会は、近年はありませんでした。「いのち輝く未来社会」をデザインするという限定的な意味合いですけども、ここでいう「デザイン」とはどのような行為であろうということも深めていかなければならないと感じております。

○ 橋爪委員（座長）

ありがとうございました。本日いただきました意見等を踏まえて、次回のワーキングに向けて時間はございませんが、事務局にとりまとめいただければと思っております。9月中間とりまとめということでございますので、お願いします。一つ、先程申し上げるのを忘れてましたが、田中委員、本日はご欠席です。メモございますので、また、ご参照いただければと思っております。次回以降も活発な議論を期待しておりますので、よろしく願いいたします。では、進行を事務局にお返しいたします。

以上